

# 東洋興業会長 松倉久幸さんの 浅草六区芸能伝

【第67幕】

先月に引き続き、今月も特別企画。地味ながらもいぶし銀のような存在だった浅草芸人について、江戸川大学の西条昇教授に書いて頂きます。反響の大きかった〈前編〉石田英二に続き、〈後編〉は、コント55号の萩本欽一、坂上二郎が師匠と慕った阿部昇二についてのお話です。

\*

昭和43年から翌44年にかけてのテレビの世界は萩本欽一と坂上二郎によるコント55号の全盛期で、どの局にも軒並み彼らの番組があった。その中の何本かに阿部昇二という小柄で中年のコメディアンがレギュラー出演しており、大抵は大柄な車だん吉（当時、たんだん吉）に思い切り張り倒されては派手に吹っ飛ん



▲昭和28年、新宿フランス座時代の阿部（上）。下は葉山のり子。

で舞台から転げ落ちていた。当時4歳だった僕にとつてその印象は強烈で、まるで悪夢に出てくる人物のように見えた。数年後には萩本と坂上の単独出演番組が増え、阿部を画面で観る機会は減ったが、それでも色々なドラマや映画で思いがけず見かけることがよくあった。

小学校の高学年になった頃に小林信彦（当時、中原弓彦）の『日本の喜劇人』を読んで、阿部が昭和28年の新宿フランス座の笑いをへひとりですらっていたこと、55号の一党には坂上がへむかしの恩人ということと連れてきたらしいことを知った。

後年、構成作家として坂上と仕事をした際に阿部についての話を聞いた。もともと歌手志望だった坂上は安藤ローレルの名で内藤ロックと漫才コンビを組むが、やがて解散。鳥倉千代子ショーでヒット曲を題材にしたコントを演じていたら、共演していた阿部から「コ

【今回の執筆者】

西条昇 江戸川大学メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科教授。大衆芸能史研究家、お笑い評論家、構成作家。メディアへの出演、新聞等への執筆、著書多数。



メディアンに向いているんじゃないか？ そっちのほうの勉強をしたみたら」と舌をかけられたという。「私はコメディアン勉強するところなんか知りませんよ」「僕は東京に帰って浅草フランス座に入るから、欠員が出たら呼ぶから……」こうして坂上は昭和36年に浅草フランス座に入り、40分ほどの軽演劇の主役を阿部と交互に務めるようになっていった。そこで、階下の東洋劇場から派遣された萩本と出会い、アドリブの火花を散らし合っている。同41年に結成された55号が人気の頂点に駆け上がると、坂上は心の師である阿部を所属事務所浅井企画に招いた。「いい人でしたね。人の世話も好きだったし、昔の芸人さんですよ。宵越しの銭は持たないって主義でしたから」

阿部の本名は常見馨。大正11年9月生まれ。台湾嘉義市で育ち、学生時代は水泳の選手だった。その後、エノケンに憧れて上京。大宮大洋の率いる一座で初舞台を踏み、浅草オペラ館へ。僕の手元にあるオペラ館のプログラムの方イルを見てみると、昭和15年8月の物に阿部の名がある。この時、17歳。翌年と翌々年の物には名が見えず、同18年4月には森川信が轟一平の別名で構成演出したオペラ館のヴァラエティ『爺さん南北へ飛ぶ』で阿部が主役の正直爺さん、佐山俊二が悪い爺さんを演じている。

戦中戦後は自らの一座で各地を回り、昭和27年は東洋興業の専属として佐山らと浅草ロック座に出演。翌28年1月に新宿フランス座に移動し、同29年春まで出演した。その

後は林百歩と漫才をした時期を経て、階上に移った浅草フランス座へ招かれた際に坂上を誘ったというわけだ。

これまで何度か生の舞台での阿部を観てきたが、今でも観ておけばよかったと、観ていないことが悔やまれてならない阿部の舞台が、昭和50年3月11〜16日に大映東京撮影所で上演された唐十郎・作、蛭川幸雄・演出『唐版・滝の白糸』である。主要な出演者は当時人気絶頂のジュリーこと沢田研二、「状況劇場」のヒロインであった李礼仙、個性派俳優として主演映画も数本ある伊藤雄之助、そして阿部という異色の顔合わせだ。当時10歳の僕は、喜劇公演ではなく、未見のアンガラ演劇を代表する唐と蛭川が組んだ作品であるという理由から足が向かなかった。しかし、この公演の劇評を読むと、乳酸飲料の代わりに羊水を売る小男を演じた阿部は、どうやら喜劇人として芸の本領を発揮したようなのだ。



▲昭和50年3月の舞台『唐版・滝の白糸』での阿部（右）と沢田研二（左）。

同年の『新劇』5月号での無署名による劇評では〈その収穫の一つというのは羊水屋をやった阿部昇二のうまさ面白さ。さすが浅草育ちのベテランよとびっくりさせてくれたのが強く印象に残る。出てきただけで役者の存在感を感じさせるなんて真似は、生半可な新劇役者のできることではない。(略)阿部昇二のおもしろさは、必ず語り続けられてゆくに違いないとさえ思う〉と絶賛され、同誌の翌6月号で軽演劇に詳しい石崎勝久も〈出てくるだけで奇妙なおかしさがある。それがいきなり電柱によじのぼってみたり、飛び上がってみたり、一つ一つの演技の切れ目が、一つ一つの笑いを呼ぶのである〉と活き活きと演じる阿部の様子を伝えている。

この公演から約2ヶ月半後の昭和50年6月から9月まで、沢田と阿部の絡みを何とTBSのテレビドラマ『悪魔のようなあいつ』で観られるようになったことに僕は驚き、歓喜した。プロデュース・演出は『時間ですよ』『寺内貫太郎一家』で喜劇人を上手く使っていた久世光彦で、おそらく久世は3月の沢田の舞台を観て、原作にはない阿川夢二役での阿部の起用を急遽決めたのではなかったか。

その2話めで、時効の迫った三億円事件の犯人である可門良(沢田)の住むアパートの二階の一室へ、ざり落ちそうな眼鏡をかけ、首から拍子木をぶら下げた紙芝居屋らしい阿部が突如、引越しの挨拶にやってくる。挨拶が済み部屋を出た阿部は中の様子を伺ううちに急な鉄骨階段で足

を踏み外して、甲高い声で悲鳴を上げながら、後頭部以外の全身でカンカンカンカン……と階から下の地面まで見事にすべり落ちたところで、チョンと拍子木を一つ打ってみせた。52歳という年齢でも、まだ、充分に動けたのである。

回を重ねるうちに夢さんの正体が良を追う刑事であることが分かり、14話めでは、良と関係の深い野々村修二(藤竜也)が経営する横浜のバーを阿部が訪れてカウンターで探りを入れる。そこへ一本の電話。受話器を取った野々村は出勤してきた3人のホステスに目配せをすると、彼女たちは「あゝら、夢さん、久しぶり〜」と阿部の両腕を抱えて、ヒョイと持ち上げ、阿部は鼻の下を伸ばしながら、空中で胡座をかいた状態のまま、隣室のソファー席まで運ばれていく。こうして両腕を抱えられて軽々と持ち上げられてしまっパターンは、やはり小柄で身軽さが身上だった佐山もよくやっていた。

ビートたけしが浅草フランス座の深見千三郎のもとで幕間コント修業をしていた昭和40年代後半の出来事を描いた自伝的小説『フランス座』には、戦前のオヘア館から深見と付き合っている阿部が久々に遊びに来て、二人でボン引きのコントを演じる場面がある。舞台袖からその様子を観ていたというたけしは、阿部について〈コメディアンだったら皆知っている人、ボケ役では本当に上手い〉へ阿部さんのような芝居、とうてい出来る気がしないが俺風にやってみようと思った」と当時の思いを記している。

昭和56年6月で深見は十年に及ぶフランス座の歩興行の契約を降りると、たけしの先輩に当たる岡山良男が契約を引き継ぎ、座長格として阿部を招いた。同58年の正月に、深見は勤めていた化粧品製造販売会社の休みを利用してフランス座の舞台に立ち、阿部とのコントを披露。これが、約1ヶ月後の2月2日の早朝に火事で亡くなった深見にとって最後の舞台となった。

昭和59年にフランス座でコント修業を始めた現「ピクポイズ」のなべかずおは、当時の阿部について「阿部先生は間がいいし、味があるし、動きがあるから、お客さんはウケるんですよ。穏やかな優しい方で、細かいことを色々教えてくれました」と語る。ある時、阿部が坂上にフランス座に出ていることを知らせる手紙を書くと、その一週間後に坂上が突然、劇場を訪れ、30分ほど阿部と談笑して帰って行ったという。



▲昭和62年1月の浅草フランス座の舞台。右から阿部、なべかずお、岡山良男。(提供・なべかずお)

フランス座での岡山と阿部による体制は昭和62年1月31日で終了する。阿部が世を去ったのは同年9月26日のことであった。

(執筆・写真提供／西条昇)